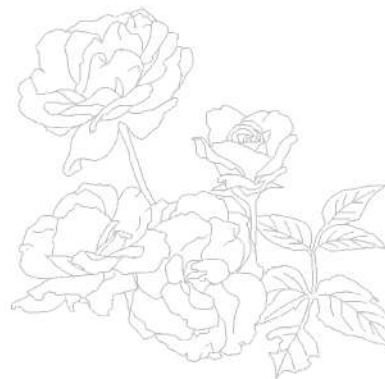


*P* NEW JAPAN  
PHILHARMONIC  
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団  
2026/2027シーズン



5  
MAY, 2026

2026/2027 シーズン  
新日本フィルハーモニー交響楽団 5月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #670 相場ひろ	1
すみだクラシックへの扉 #39 小室敬幸	7
楽員ストーリーズ ⑤ 森 明子 (オーボエ&イングリッシュホルン)	15
NJP from Inside	18
2026/2027シーズン 定期演奏会プログラム	22
NJP 6月、7月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	28
お客様からの声	31
室内楽シリーズ	32
音のアトリエ	33
「パトロネージュ・システム」のご案内	38

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

〈コンサートの感想をお寄せください〉

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。  
<https://www.njp.or.jp/qs>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。



特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

Triphony Hall Series  
Suntory Hall Series  
2026-2027 Season

#670

5.8 [金]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団  
サントリーホール・シリーズ 第670回定期演奏会  
2026年5月8日(金) 19時00分  
サントリーホール

5.9 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団  
トリフォニーホール・シリーズ 第670回定期演奏会  
2026年5月9日(土) 14時00分  
すみだトリフォニーホール

●ラヴェル (1875-1937)

ラ・ヴァルス  
Maurice Ravel: La Valse

約15分

●ショスタコーヴィチ (1906-75)

チェロ協奏曲第1番 変ホ長調 op. 107 \*  
Dmitry Shostakovich: Cello Concerto No. 1 in E-flat major, op. 107 \*

約30分

- I. Allegretto
- II. Moderato
- III. Cadenza
- IV. Allegro con moto

—— 休憩20分 ——

●ブラームス (1833-97)

交響曲第2番 二長調 op. 73  
Johannes Brahms: Symphony No. 2 in D major, op. 73

約45分

- I. Allegro non troppo
- II. Adagio non troppo
- III. Allegretto grazioso (Quasi andantino) – Presto ma non assai
- IV. Allegro con spirito

[指揮] ミシェル・タバシュニク

Michel Tabachnik, Conductor

[チェロ] アンドレイ・イオニーツァ \*

Andrei Ioniță, Cello \*

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙

Munsu Choi, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール (公益財団法人墨田区文化振興財団) [5/9公演]

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))  
独立行政法人 日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。  
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは  
こちらから  
<https://www.njp.or.jp/qs>





©Jean-Baptiste Millot

### ミシェル・タバシュニク [指揮]

Michel Tabachnik, Conductor

2008年よりブリュッセル・フィルハーモニックの首席指揮者&芸術監督を務め、現在は名誉指揮者。グルベンキアン管弦楽団音楽監督、ロレーヌ国立フィル音楽監督、アンサンブル・アンテルコンタンポラン音楽監督を歴任し、ノールト・ネーデルラント響では首席指揮者を経て現在は名誉指揮者を務める。

これまでに、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、パリ管、シュトゥットガルト放送響、ハンブルク北ドイツ放送響、サンクトペテルブルク・フィル、ベルリン・コンツェルトハウス管などを指揮し、ルツェルン音楽祭やザルツブルク音楽祭にも登場している。ジュネーヴ音楽院でピアノ、作曲、指揮を学ぶ。ブレーズとは緊密な関係を築き、BBC響のアシスタントを務め、スペイン放送響ではマルケヴィチの最初のアシスタントとなった。1971年、カラヤンに招かれてベルリン・フィルを指揮し大成功をおさめ、確固たる地位を確立した。

シュトックハウゼン、ペリオ、リゲティ、メシアンなどの初演を数多く手掛け、特にクセナキスからは優れた解釈者として厚い信頼を得る。作曲家としても多数の作品を残している。

### アンドレイ・イオニツァ [チェロ]

Andrei Ioniță, Cello



©Nikolaj Lund

『ロンドン・タイムズ』より、「過去10年間で現れた最も刺激的なチェリストの一人」と称されている。ブカレスト生まれ。8歳からチェロを始め、アン=マリエ・バラディに師事後、ベルリン芸術大学でイェンス=ペーター・マインツに師事。2015年にチャイコフスキー国際コンクール第1位を獲得し、世界的に注目を集める。これまでに、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、バイエルン放送交響楽団、ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団、チューリヒ・トーンハレ管弦楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、シカゴ交響楽団などと、指揮者ではヘルベルト・ブロムシュテット、パーヴォ・ヤルヴィ、マンフレッド・ホーネック、シルヴァン・カンブラン、ケント・ナガノらと共演している。カーネギーホール、ベルリン・フィルハーモニーなどの著名なホールに登場しているほか、マルボロ音楽祭、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭などに出演している。CD『Oblique Strategies 無伴奏チェロのための作品集』は、高い評価を得ている。

ムステイスラフ・ロストロポーヴィチ(1927~2007)が20世紀のもっとも偉大なチェロ奏者と評価されるのは、もちろんチェロの力量や音楽性の高さもあるだろうけれども、なにより多くの作曲家と交流を持ち、彼らとの共同作業で数多くの名品を世に出すことに貢献したからに他ならない。旧ソビエト連邦においてはセルゲイ・プロコフィエフをはじめ、アラム・ハチャトゥリアン、アルフレート・シュニトケらが彼に作品を献上しているし、他にもポーランドのヴィトルト・ルトスワフスキやフランスのアンリ・デュティユー、英国のベンジャミン・ブリテンといった、国際的に活躍したビッグ・ネームがロストロポーヴィチの演奏を念頭に置いた作品を書いており、それらの多くがこんにちも広く演奏され続けている。同時代の作曲家たちと広くコラボレーションした演奏家も決して少なくないけれども、その成果が演奏会のレパートリーに定着した率まで考えると、ロストロポーヴィチの存在感は圧倒的と言えまいか。

その中でもっとも縁の深い作曲家のひとりであったのが、ドミトリー・ショスタコーヴィチである。ショスタコーヴィチは比較的後年になってからはじめてチェロ協奏曲を手がけたけれども、完成させた2曲のどちらもが彼のために書かれたし、ソプラノ独唱とヴァイオリン、チェロ、ピアノのための「アレクサンドル・ブロークの詩による七つの歌曲」はロストロポーヴィチと、彼の妻であった歌手ガリーナ・ヴィシネフスカヤが演奏することを念頭に作曲された。2曲のチェロ協奏曲、特に第1番はいまやチェロのためのレパートリーとして外すことのできない人気曲であるし、「ブローク歌曲集」は演奏機会こそ恵まれないものの、知る人ぞ知るショスタコーヴィチ晩年の傑作である。ロストロポーヴィチは単に新作を多く委嘱し、初演したばかりでなく、作曲者の創造性をよく引き出すオーラのようなものをふりまっていたのかもしれない。

### ■ラヴェル：ラ・ヴァルス

1917年1月の母マリの死以来創作上のスランプに陥っていたモーリス・ラヴェル(1875~1937)は1919年、立ち直りの契機とするべく新作の作曲にとりかかった。それは彼が日頃偏愛するヨハン・シュトラウス2世のワルツへのオマージュで、「ラ・ヴァルス」(ヴァルスとはフランス語でワルツのこと)と題された楽譜は、1920年12月に初演された。

J.シュトラウスの  
オマージュとして ▶

楽譜に記された言葉 ▶

ラヴェル自身はバレエのあらすじを楽譜の冒頭に書きとめている。「渦

巻く雲の中、ワルツを踊る男女の一群が光に照らされて垣間見える。雲が次第に開けていくと、そこは大きな広間で、沢山の人が回転しながら踊っている。舞台が少しずつ明るくなっていく。全強奏と共にシャンデリアが一斉に光り輝く。1855年ごろの帝国の宮廷である」。

[楽器編成]フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、吊しシンバル、トライアングル、タンバリン、タムタム、アンティークシンバル、カ斯塔ネット、グロックンシュピール、ハーブ2、弦楽5部。

### ■ ショスタコーヴィチ：チェロ協奏曲第1番 変ホ長調 op.107

1952年2月、ドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906~75)はセルゲイ・プロコフィエフ(1891~1953)によるチェロと管弦楽のための「交響的協奏曲」の初演を聴いた。深い感銘を受けたショスタコーヴィチは、自らもチェロ協奏曲のジャンルに挑戦したいと思いつく。作品が具体的な構想を得たのは1959年のことで、同年春に書き始められ、10月9日にモスクワで初演された。チェロ独奏は「交響的協奏曲」を初演したムスティスラフ・ロストロポーヴィチが担当した。

**第1楽章** アレグレット。自由なソナタ形式により、曲想は行進曲を思わせる。いくぶんおどけた調子の第1主題に対して、第2主題はやや熱を帯びた歌を歌う。再現部にはホルン独奏の第2主題を伴うごく短いカデンツァが置かれる。

**第2楽章** モデラート。3部形式で書かれた第2楽章は、一転して静謐で歌謡的な音楽となる。切れ目なく第3楽章に続く。

**第3楽章** カデンツァ。この作品は当初3楽章構成となる予定であったが、第2楽章末尾に置かれた大規模なカデンツァが独立した楽章として扱われることとなった。第2楽章のさまざまな素材を用いており、第1楽章の第1主題も顔を出す。さらに切れ目なく第4楽章に続く。

**第4楽章** アレグロ・コン・モルト。ロンド・ソナタ形式で、短い序奏を経てオーボエとクラリネットに主要主題があらわれる。チェロに現れる副主題はやや行進曲調を帯びる。主要主題が繰り返された後、舞曲調の3拍子による三つ目のエピソードが導入される。第1楽章第1主題が回想され、執拗に繰り返された末に主導権を握り、コーダを迎える。

[楽器編成]チェロ独奏、フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2(コントラファゴット持替)、ホルン、ティンパニ、チェレスタ、弦楽5部。

### ■ ブラームス：交響曲第2番 二長調 op.73

前作と好対照に ▶ 1876年11月に交響曲第1番ハ短調op.68が初演されたわずか半年後の翌年6月に、ヨハネス・ブラームス(1833~97)は交響曲第2番の作曲に着手した。第1番の作曲に20年以上の月日を費やしたのとは好対照なことに、第2番はわずか数ヶ月の間に一気に書き上げられ、同年10月ごろには完成に至ったようである。初演は同年12月30日、ウィーンで、ハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団によって行われ、第1番同様に大成功を収めた。

曲の構成と音楽の特徴 ▶ **第1楽章** アレグロ・ノン・トロppo

ソナタ形式の構成を持つ。曲はまず低弦が「ニ~嬰ハ~ニ」の三つの音からなる動機を提示して始まる。続いてホルンと木管が奏でる第1主題は、伸び伸びとした田園的な雰囲気をつたえ、ヴィオラとチェロにあらわれる第2主題は短調で、ワルツめいたリズムを持つもののほの暗い雰囲気を醸す。長大な主題提示部の後、第1主題に基づいていくぶん短めの展開部を経て、再現部に至る。

**第2楽章** アダージョ・ノン・トロppo

かなり自由なソナタ形式による。冒頭、チェロで荘重に歌われる第1主題に対し、木管にあらわれる第2主題が優美な趣を添える。緊迫感とともに高揚をみせる展開部の後、再現部では第1主題が展開風に扱われて、第2主題を回想せずに終わる。

**第3楽章** アレグレット・グラツィオーソ(カジ・アンダンティーノ)

スケルツォに代わって、たいへん素朴な、オーストリアの民俗舞曲であるレントラーを思わせる楽章が据えられている。オーボエにあらわれる主題とその変奏が代わる代わる演奏され、明快な色彩が楽しい雰囲気を醸す。

**第4楽章** アレグロ・コン・スピリット

ソナタ形式による。第1番の終楽章に比べるとより明朗であり、構成もよりシンプルになっている。軽快かつ柔らかく始まるこの楽章は、流麗な第1主題、弦の中音域で歌われる第2主題が出される提示部の後、楽章冒頭に立ち帰って展開部を迎え、音楽は大きな曲折を描く。穏やかな気分の内に再現部に入ると、結尾は雄渾な金管の合奏をまじえて、朗らかに大団円を迎える。

[楽器編成]フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦楽5部。

プロコフィエフ作品から刺激を受け ▶

曲の構成と音楽の特徴 ▶

●シベリウス (1865-1957)

トゥオネラの白鳥 op. 22, no. 2 \*

Jean Sibelius: The Swan of Tuonela, op. 22, no. 2 \*

約10分

●グリーグ (1843-1907)

ピアノ協奏曲 イ短調 op. 16 \*\*

Edvard Grieg: Piano Concerto in A minor, op. 16 \*\*

約30分

I. Allegro molto moderato II. Adagio III. Allegro moderato molto e marcato

—— 休憩20分 ——

●グリーグ

劇付随音楽『ペール・ギュント』op. 23 より

Edvard Grieg: "Peer Gynt", op. 23, excerpts

約45分

第1番(第1幕への前奏曲): 婚礼の場にて

No. 1 (Prelude to Act 1): At the Wedding

第4番(第2幕への前奏曲):  
花嫁略奪とイングリッドの嘆き

No. 4 (Prelude to Act 2):  
The Abduction of the Bride. Ingrid's Lament

第8番(第2幕): 山の魔王の宮殿にて

No. 8 (Act 2): In the Hall of the Mountain King

第12番(第3幕への前奏曲): オーゼの死

No. 12 (Prelude to Act 3): The Death of Åse

第13番(第4幕への前奏曲): 朝の気分

No. 13 (Prelude to Act 4): Morning Mood

第15番(第4幕): アラビアの踊り

No. 15 (Act 4): Arabian Dance

第16番(第4幕): アニトラの踊り

No. 16 (Act 4): Anitra's Dance

第19番(第4幕): ソルヴェイグの歌 \*\*\*

No. 19 (Act 4): Solveig's Song \*\*\*

第21番(第5幕への前奏曲):

No. 21 (Prelude to Act 5):

ペール・ギュントの帰郷。夕方の嵐の海

Peer Gynt's Homecoming. Stormy Evening on the Sea

第26番(第5幕): ソルヴェイグの子守唄 \*\*\*

No. 26 (Act 5): Solveig's Cradle Song \*\*\*

[指揮] コルニリオス・ミハイリディス

Kornilios Michailidis, Conductor

[イングリッシュホルン] 森 明子 \*

Akiko Mori, English horn \*

[ピアノ] 角野未来 \*\*

Mirai Sumino, Piano \*\*

[ソプラノ] 安川みく \*\*\*

Miku Yasukawa, Soprano \*\*\*

[コンサートマスター] 西江辰郎

Tatsuo Nishie, Concertmaster

演奏会アンケートは  
こちらから  
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス

公益財団法人 オリックス宮内財団



文芸春秋

Norwegian Embassy  
Tokyo



Embassy of Finland  
Tokyo

- 主催: 公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催: すみだトリフォニーホール(公益財団法人墨田区文化振興財団)
- 特別協賛: オリックス株式会社/公益財団法人オリックス宮内財団
- 助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))  
独立行政法人 日本芸術文化振興会
- 後援: ノルウェー大使館、フィンランド大使館

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。  
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

あしたに必要なものをつくる。人々の心や地球がやせ細るものではない、  
希望と呼べるものをつくる。そのために集まる。そして100年先を想い、大事なことに気づき、  
知恵を探す。技術を生み出す。きっとよくなる。きっとよくなる。  
そのころさしを推進力に、つくりながら、つくりながらしあわせを見つける。

「人が生きる」につながるものを、  
KAJIMAはつくる。

豊島美術館

豊島特設サイト



100年をつくる会社  
in 鹿島



## コルニリオス・ミハイリディス [指揮]

Kornilios Michailidis, Conductor

1989年7月2日生まれ。ギリシャ出身。  
東京国際指揮者コンクール2024で第1位を獲得したギリシャ出身の指揮者でありピアニスト。これまでアイスランド交響楽団のコンダクター・イン・レジデンスを務めたほか、フィンランド放送交響楽団とフランス放送フィルハーモニー管弦楽団で、アシスタント・コンダクターを歴任。テアトル・レアル(マドリッド)とも定期的に共演しており、これまで『魔笛』『中国のニクソン』『エフゲニー・オネーギン』を指揮した。

シベリウス音楽院を卒業後は、ロシア・ナショナル管弦楽団、ラハティ交響楽団、シュターツカペレ・ワイマールなどの主要オーケストラと共演したほか、ギリシャのすべての主要オーケストラを指揮。2016年にはクフォニシア・クラシック音楽祭を創設した。音楽以外の活動としては、現役の飛行家でもある。



## 森 明子 (NJPオーボエ&イングリッシュホルン奏者)

[イングリッシュホルン]

Akiko Mori (Oboe & English horn, NJP), English horn

三重県立津高等学校を経て、1988年東京藝術大学入学。藝大在学中に東京文化会館推薦新人音楽会に出演。小島葉子、小畑善昭の両氏に師事。92年同大学を卒業。94年新日本フィルハーモニー交響楽団入団。

NJPでの公演ではこれまでに98年佐渡裕指揮「NJP&三重特別演奏会」、99年岩城宏之指揮第276回定期演奏会(「トゥオネラの白鳥」)、99年ゲルハルト・ボッセ指揮「カザルス定期・休日のオーケストラ第19回」、2004年クリスティアン・アルミンク指揮第374回定期演奏会、12年井上道義指揮ニューイヤー・コンサート、24年井上道義 ザ・ファイナル PART II 「みちよし先生の世界漫遊記」で、独奏を務めた。



©T.Tairadate

## 角野未来 [ピアノ] Mirai Sumino, Piano

1998年千葉県生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、東京藝術大学を経て、同大学院音楽研究科を修了。現在はフランスに拠点を移し、リヨン国立高等音楽院マスター課程に在籍中。

アンリ・コワルスキ国際ピアノコンクール第1位(フランス)、第21回東京音楽コンクール第3位など国内外のコンクールで多数入賞。2020年度公益財団法人青山音楽財団奨学生。大学在学中に藝大クラヴィーア賞を受賞し、藝大フィルハーモニー管弦楽団と共演。また大学卒業に際しアカンサス音楽賞、同声会賞、藝大クラヴィーア賞を受賞。国内外の数多くの演奏会に出演するほか、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、千葉交響楽団、N響メンバーなど数々のオーケストラと共演。これまでに金子勝子、吉田友昭、有森博、ジェローム・グランジョンの各氏に師事する。



©CMR-Photography

## 安川みく [ソプラノ] Miku Yasukawa, Soprano

徳島県出身。国立音楽大学、東京藝術大学大学院を経て、英国ギルドホール音楽院アーティストディプロマ課程で学ぶ。Gold Medal 2023ファイナリスト(パービカンセンター)。宗教曲、オーケストラ作品に多く出演するほか、オペラではHurn Court Opera『ドン・パスクワレ』ノリーナ役で英国デビュー。同年に刊行された『Opera Now』では五つ星で評価された。

これまでにバツハ・コレギウム・ジャパン、東京交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、アンサンブル金沢など国内のオーケストラのほか、ボーンマス交響楽団、パドルー管弦楽団、マカオ管弦楽団等と共演。Celestial Voiceで出演した山田和樹指揮、バーミンガム市交響楽団『ファウストの劫罰』はBBC3で放送され、『The Telegraph』にて五つ星評価を得た。今春はオランダバツハ協会の《マタイ受難曲》14公演ツアーにソリストとして参加。よんでん文化振興財団、Sidney Perry Foundation奨学生。令和四年度文化庁新進芸術家海外研修員。

公式HP: mikuyasukawa.com X: @mikusop

日本では大雑把に「北欧」という括りを用いることが多いのだが、ヨーロッパの言語だと実は何段階かに分かれている。まずは19世紀半ばにスカンディナヴィア半島に位置するデンマーク、スウェーデン、ノルウェーが「汎スカンディナヴィア主義 Scandinavism」として結束を強め、この3国は1919年に非政府組織として「北欧協会 Foreningen Norden」を設立。1922年にアイスランド、1924年にフィンランドが加入してから、時間をかけて5国は「ノルディック Nordic」と括られるようになっていく。

一方、バルト三国のうち、ラトビアやエストニアはそれぞれノルディックやスカンディナヴィアとの近さを主張していた時期もあったが、ソ連に併合されてしまったために実現しなかった。状況が変わってゆくのは1991年のソ連崩壊後で、リトアニアを含む独立を回復した3国がノルディックの5国に接近。こうして8国をまとめて「北欧 Northern Europe」と日本でも呼ぶようになったのである。

### ■ シベリウス：トゥオネラの白鳥 op. 22, no. 2

フィンランドの作曲家ジャン・シベリウス(1865~1957)は音楽好きの叔父から与えられたヴァイオリンを弾きはじめ、自然と作曲も手掛けるようになった。ヘルシンキ音楽院で学んだあと、24歳頃にベルリンへ留学。次に訪れたウィーンで作曲されたのが、フィンランドの民話・神話を編纂した民族叙事詩「カレワラ」に基づく「クレルヴォ交響曲」(1891~92)だ。

この交響曲が初演された翌年、今度は「カレワラ」を題材にフィンランド語のオペラ「船の建造」(1893年7月~1894年8月頃)の作曲を試みる。様々な要因が重なって完成することはなかったが、未完で残された素材をもとに仕立て直されたのが連作交響詩「レンミンカイネン組曲」op. 22(1895年完成)だ。当初、オペラの序曲として書きはじめられた「トゥオネラの白鳥」は全4曲のうち第2曲に位置しているが、単独で演奏される機会が多い。

初版のスコアにはドイツ語とフランス語で「トゥオネラ、すなわち死の国——フィンランド神話における冥界——は、黒く濁って激しく流れる大河に囲まれており、その川の上をトゥオネラの白鳥が堂々と歌いながら進んでゆく」と、描かれた情景が説明されている。白鳥を象徴するのはオーボエ属のイングリッシュホルンだ。

[楽器編成]イングリッシュホルン独奏、オーボエ、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、ハープ、弦楽5部。

叙事詩カレワラを  
発想源に

オペラの序曲として着手

音楽の特徴

ノルウェーからドイツへ

同郷の音楽家からの影響

名曲誕生の背景

曲の構成と  
音楽の特徴

### ■ グリーグ：ピアノ協奏曲 イ短調 op. 16

ノルウェーの作曲家エドヴァルド・グリーグ(1843~1907)は母からピアノの手ほどきを受けながら、独学で作曲をはじめた。親族(母方のおおの夫の弟)であるノルウェー出身の偉大なヴァイオリン奏者オーレ・ブル(1810~80)に15歳で才能を認められ、その数カ月後にはドイツのライプツィヒ音楽院に留学してピアノと作曲を学んでいく。

卒業後の1863~65年にかけてはデンマークの首都コペンハーゲンに移り住み、かつてライプツィヒ音楽院でも教えていたデンマークを代表する作曲家ニルス・ゲーゼ(1817~90)や同郷のリカール・ノールローク(1842~66)らと交流を重ねた。特に後者との出会い、ノールロークが23歳で早逝したことがグリーグに与えた影響は非常に大きく、ノルウェーのアイデンティティを反映した音楽を志向する契機となる。

1866年10月にノルウェーに帰国してからは民謡の研究者と交遊したりしながら、1867年6月頃からはオスロ(当時の名称はクリスチアニア)でオーケストラの指揮者を務めた。ところが2年で疲弊してしまい、療養と落ち着いて作曲できる環境を求めてデンマークに滞在。当地で1868年夏に書かれたのが、このピアノ協奏曲である。

モデルにしたロベルト・シューマンのピアノ協奏曲を深く研究した成果と、ピアニストのエドムント・ノイペルト(1842~88)との交流を通して学んだ技巧的なピアノ書法が反映されている。初演の独奏はノイペルトが務め、彼に献呈された。初演後には何度も改訂を行っており、とりわけオーケストレーションには多くの変更が加えられた。現在演奏されているのはグリーグが亡くなる直前に手を入れた1907年版(もしくは親交のあったパーシー・グレインジャーによる1917年版)である。急-緩-急の全3楽章で構成されている。

**第1楽章** ソナタ形式(提示部-展開部-再現部-コーダ)。有名な導入のあと、木管楽器が主導して哀愁漂わせる第1主題、少し明るい響きとなるチェロが歌いだす第2主題がソナタ形式の軸となる。ピアノの技巧的なパッセージの後に連なる管弦楽の総奏は、雰囲気こそ大きく異なるが導入のピアノを変奏した音型だ。展開部を経て、ピアノに第1主題が戻ってくると再現部に。ピアノ独奏によるカデンツァのあと、導入の音型でコーダとなる。

**第2楽章** 三部形式(A-B-A')。弱音器をつけた弦楽器が、穏やかだが北欧の寒さも感じさせる変二長調の旋律ではじまる。中間部(B)か

らピアノが加わり、楽章冒頭の旋律をピアノが堂々と奏でると再現(A')に。そのまま切れ目なく終楽章へと繋がる。

**第3楽章** ロンド風の自由な形式(提示部[A-B-A'-C]-再現部[A-B-A']-コーダ[A'-C'])。短い導入のあと、ピアノがノルウェーの民族舞曲風のロンド主題(A)を弾きはじめる。管弦楽が最初のピークに達すると、ピアノが主導して転調を繰り返していく(B)。第2主題の定型である平行調にもなるのだが経過的な役割しか担わず、ロンド主題(A')に回帰。続くフルートが奏でる穏やかなメロディ(C)が第2主題の代わりだ。再現部でCは再現されないが、Aが明るい3拍子となつてはじまるコーダのクライマックスでCが高らかに歌い上げられる。

[楽器編成]ピアノ独奏、フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。

### ■ グリーク：劇付随音楽「ペール・ギュント」op. 23 より

グリークとイプセン ▶ 「ペール・ギュント」の作者ヘンリック・イプセン(1828~1906)はノルウェーの劇作家で、リアリズム演劇を確立した「近代劇の父」として有名である。実はグリークの恩人でもあるオーレ・ブルが1851年秋に立ち上げた国民劇場において、座付き作家兼舞台監督として雇われている。また後に「ペール・ギュント」を執筆する際には、ブルが主人公ペールのモデルのひとりとなった。

劇作品誕生の経緯 ▶ 1866年、イプセンは理想に邁進する牧師を主人公とする詩劇「ブラン」を執筆。次に対極的な人物を描こうとして主人公に選ばれたのが、ほら吹きで移り気なペール・ギュントだった。作家ペテル・クリスティン・アスピョルンセン(1812~85)が採集した民話に登場する猟師が素地になっているのだが、前述したブルに加え、イプセンの父クヌートと母マリアンが、ペールの父ヨンと母オーゼのモデルになっていたりと、イプセンの個人的な体験が織り込まれている。ゲーテの「ファウスト」のような上演を前提としない読む戯曲として出版された。

イプセンからの提案で ▶ 数年後、デンマークとノルウェーの劇場が舞台化を希望したが、どちらも実現せず。イプセン自身がクリスチャニア(現在の首都オスロ)の劇場で上演しようと、1874年1月23日にグリーク宛の手紙で音楽を依頼したことで生まれたのが、全36曲で構成された劇付随音楽だ。オーケストラで演奏される際はグリーク自身が編纂した2つの組曲(全8曲)をそのまま取り上げるか、抜粋することが多いのだが、今回は組曲の収録曲を実際の

曲の構成と  
音楽の特徴 ▶

上演順に並べ替え、組曲に含まれていない第1番と第26番を加えている。

**第1幕** 物語は口先ばかりの息子ペールを母オーゼが叱責するところからはじまるが、幕が上がる前に**第1番「婚礼の場にて」**が前奏曲として演奏される。この幕の見せ場となる結婚式の祝祭的な雰囲気と、ヴィオラのソロで2拍子の「ハリング」と3拍子の「スプリングル」という民族舞曲が奏され、その間に本作のヒロインであるソルヴェイグをあらわす悲しげな旋律が挟み込まれる。

**第2幕** 前幕の終わりでペールは、かつて自分を好いてくれていた地主の娘イングリッドの結婚式から彼女を誘拐する。しかし式で見かけたソルヴェイグを忘れられず、すぐにイングリッドを捨ててしまうのが**第4番「花嫁略奪とイングリッドの嘆き」**だ。逃げた先で今度は緑衣の女と結婚を誓うが、実は彼女は精霊トロルの王ドヴレの娘。結婚を拒否したペールに一族郎党で襲いかかってくるのが**第8番「山の魔王の宮殿にて」**である。

**第3幕** ソルヴェイグと再会したペールは幸せを掴みかける。だが緑衣の女がペールとの子を連れてきたので、過去の過ちを忘れさせてくれない。ソルヴェイグに待っていてほしいと告げて、今際の際の母を看取りにいくのが**第12番「オーゼの死」**だ。ペールは放浪の旅をはじめた。

**第4幕** 母の死からおよそ20年後。ノルウェーから遠く離れたアフリカのモロッコで成功を収めたペールだったが、財産を乗せた船ごと仲間盗まれてしまう。その翌朝、置き去りにされたペールが目覚め、砂漠で太陽が昇っていく様子を描いたのが**第13番「朝の気分」**である。相変わらず愚かなペールは予言者であると偽り、アラビアの族長の娘アニトラを口説こうとするのが**第15番「アラビアの踊り」と第16番「アニトラの踊り」**だ。音沙汰がなくてもノルウェーでペールを待ち続けるソルヴェイグの心情として「あなたはいつか私の元に戻ってくる」とソプラノが歌うのが**第19番「ソルヴェイグの歌」**である。

**第5幕** 年老いたペールは故郷に戻ろうとするが、嵐に巻き込まれてしまうのが**第21番「ペール・ギュントの帰郷(夕方の嵐の海)」**である。なかなかソルヴェイグの待つ山小屋に辿り着けず、やっと着いた頃には全てを失っていた。彼女が「眠れ、私の最も愛する坊やよ!」と歌うのが**第26番「ソルヴェイグの子守唄」**である。ペールは波乱万丈の人生を、亡き母オーゼの代わりであるソルヴェイグのもとで終えるのだ。

[楽器編成]フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、タンバリン、小太鼓、ソプラノ独唱(2曲)、ハーブ、弦楽5部。